

平成 27 年度 ACTR

「日本のふるさと大丹後展」展示解説について

三輪 眞嗣・島本 多敬

京都府京都文化博物館において 2015 年 12 月 5 日から 2016 年 1 月 17 日まで開かれた特別展、「日本のふるさと大丹後展」（以下、大丹後展）は、丹後地域に伝わる史資料のなかから約 100 点あまりを、「交流」「伝説」「霊地」「生産」の四部構成で紹介していく企画展であった。この大丹後展には京都府立大学も主催者として加わり、本学の大学院生が展示解説員という形で参加した（正式な名称は「日本のふるさと大丹後展協力員」。以下、解説員）。解説員は既存の展示構成を横断し、特定の資料に焦点をあて、学生ならではの目線から大丹後展の新たな見方を提示することを目的として、5 月から 6 ヶ月間、個人の研究と現地調査、リハーサルを重ねるなかで解説案を練り、12 月 6 日・13 日・20 日・1 月 10 日の計 4 回、展示解説を行なった。以下、その活動の概要を記す。

参加者

教員：上杉和央（統括）

博士後期課程：川口成人（A 班）・島本多敬（B 班）・三輪眞嗣（A 班）

博士前期課程：井上真美（B 班）・大平理紗（A 班）・川崎雄一郎（B 班）

1. 解説までの道程

2015 年 5 月 13 日：第 1 回全体会議

大丹後展の概要と展示解説の目的・方針を確認し、解説の班分けを行なった。班員は参加者の項に記した通りである。これ以降、各班で出品リストをもとに解説のたまかなテーマと担当する作品を選定していった。

2015 年 8 月 6 日：第 2 回全体会議

各班の解説で取り上げる資料に重複がないかを確認した。この時、各班とも 10 月までに解説案をまとめること、10 月中に現地調査を行なうことが決定した。

10 月 1 日：第 3 回全体会議

各班の解説のテーマ及び解説の内容を確認した。また、10 月 17・18 日の現地調査に向けての打ち合わせも行なった。

10 月 17・18 日：第 1 回現地調査

京丹後市教育委員会の新谷勝行氏にご案内いただき、京丹後市を中心に現地調査を行なった。調査地と内容は以下の通りである。

10 月 17 日

成相寺（宮津市）・京都府立丹後郷土資料館（宮津市）・伊根浦（伊根町）

成相寺では現本堂より上手にある中世墓と旧本堂跡を回り、本堂内に掲げてある頼光の鬼退治絵馬の撮影を行なった。京都府立丹後郷土資料館では特別展「大海原に夢を求めて—丹後の

廻船と北前船一」および常設展を見学した後、「捕鯨実況図」の調査を行なった。その後伊根浦に向かい、舟屋と集落一帯の眺望を確認した。

10月18日

円頓寺（京丹後市、以下全て同市）・縁城寺・嶋兒神社・遊地区・京丹後市立丹後古代の里資料館・竹野神社・神明山古墳

円頓寺では銅製経筒・円頓寺惣門再興勸進状の保存状況を確認した。縁城寺では「虫干し」が行なわれており、錫杖・金銅装笈や古文書など同寺の所蔵する資史料の大部分を目にすることができた。浦兒神社・遊地区では亀墓の調査を行なった。特に遊地区の亀墓は竹藪の中にあり、発見が困難であったことを記しておく。その後、丹後古代の里資料館で常設展を見学し、近在する竹野神社・神明山古墳を経て、現地調査を終了した。

11月4日・5日：第4回全体会議・リハーサル

全体会議では、文化博物館との連絡や解説に必要な物品調達の手順についての取り決めを行なった。その後、4日にはA班、5日にはB班の解説リハーサルを行ない、各班の解説コンセプト・内容を点検し、これ以降は解説そのものの向上を心がけることを確認した。両班共通の課題として、解説の補助ツールとして拡大パネルなどを活用すること、資料に目線を誘導すること、解説時には取り上げない資料との関連も組み込んでいくことなどが挙げられた。

11月16日・17日：第2回現地調査

解説員のうち、川口・島本・三輪が10月の現地調査で行くことができなかった場所を中心に現地調査を実施した。調査地と内容は以下の通りである。

11月16日

成相寺・伊根浦

成相寺では成相寺参詣曼荼羅に描かれた境内と現在の伽藍配置との照合を行ない、その後、町石を確認しつつ傘松公園に至る参詣道を下っていった。伊根浦では青島へ渡り、鯨の供養墓の写真撮影をした後、伊根集落の踏査を行なった。

11月17日

松尾寺（舞鶴市）

松尾寺駅から松尾寺までに点在する町石の計測・判読の調査を行い、松尾寺境内では参詣曼荼羅中の堂舎と現在の伽藍配置、曼荼羅に描かれた自然描写と現代の自然景観との対照などを行なった。また、松尾寺宝物殿で公開されている文化財を見学した。

11月20日：事前打ち合わせ

京都文化博物館において、新谷勝行氏、同館学芸部の橋本章氏、村野正景氏の同席のもと、展示解説に関する事前打ち合わせを行なった。12月4日の直前リハーサル及び解説当日の流れ、その他詳細について確認した。

11月24日・25日：丹後の地域史に関する勉強会

出品資料との関連を意識しながら、各班員が京丹後市・伊根町・与謝野町・宮津市・舞鶴市の自治体史をまとめ、丹後地域の通史的理解を深めるための勉強会を行なった。同日、直前リハーサル及び解説当日の流れを確認した。

12月4日：直前リハーサル

京都文化博物館において、直前リハーサルを行なった。午前中には同館での展示作業が既に終了していたので、各班が作品の位置や展示ケースの高さ、解説時の動線などを確認しつつ、簡単なリハーサルを行なうことができた。午後からは、開会式に出席した後、フロアガイドとの顔合わせをし、新谷氏による列品解説を聞いた。この時、音声ガイドの内容と展示解説の内容との齟齬の有無、展示替えやモノの状態により急遽出品を控えることになった作品のチェックなどを行なった。

以上が解説までの大まかな流れである。解説案を作っていく上で、資料の細部を知るために写真を必要とする場面やキャプション・図録との照合をする場面が多々あり、これらについては新谷氏のご高配を賜り、随時写真やデータを提供していただいた。当然のことながら、展示担当者との連絡を密にする必要を感じた所以である。また、解説を予定していた資料の出品を見合わせるという事態もあった。展示においては不測の事態を想定し、解説案を作り直す柔軟さを常に意識する必要がある。そのためには、展示される史資料の研究を十分にしておくことが求められる。

2. 各班の解説内容

ここからは各班の解説内容と当日の状況、反省点などについて述べる。解説で取り上げた資料の位置及び動線については後掲の図を参照されたい。作品に付した記号は図中の記号と対応している。

①、A班展示解説

A班は第1回全体会議の後、解説テーマを検討する中で、参詣曼荼羅の展示替えに合わせて2パターンの解説を行なうことになった。テーマは「丹後の信仰世界」、「丹後に集う人々」とした（以下、前者をA班甲（12月6日実施）、後者をA班乙（1月10日実施）とする）。テーマと解説作品を選定して以降、6月17日・7月22日・9月28日に班での打ち合わせを行ない、各自の研究や現地調査を経て、11月4日の全体リハーサルまでに各班員が解説案を作成・統合していった。その後は、12月1日・14日・1月7日と班単位での打ち合わせ・リハーサルを重ね、解説の精度を高めていった。

A班甲の解説内容 A班甲は導入として、大田南五号墳出土青龍三年銘方格規矩四神鏡（京丹後市蔵・イ）から「丹後王国」とも称されるような丹後の支配勢力の存在を媒介として、大陸と丹後との交通が盛んに行なわれたことを説明し、続いて千歳下遺跡出土品（舞鶴市蔵・ロ）から、丹後における海上祭祀を紹介した。次に、「山の信仰」ともいえる修験道に係る資料として、伝源頼光の金銅装笈（成相寺所蔵・ハ）・鑄銅手錫杖（縁城寺蔵・ニ）を取り上げ、丹後の山々を舞台とした修験道の広まりに触れ、続いて松尾寺参詣曼荼羅（松尾寺蔵・ホ）の解説を行なった。松尾寺参詣曼荼羅に描かれた海の信仰（観音信仰）と山の信仰（修験）の要素を取り上げ、参詣曼荼羅を読み解くことで見えてくる、丹後の信仰世界の豊かさを強調した。

A班乙の解説内容 ここでは成相寺に関わる資料を取り上げ、参詣曼荼羅の世界から丹後に集う人々の様相を紹介した。導入として大江山鬼退治図（岩屋寺蔵・イ）を取り上げ、金銅

装笈・伝頼光願文（成相寺蔵・ろ／は）から頼光の鬼退治伝説の粗筋を紹介し、頼光たちが山伏を装い丹後に向かったことを強調した。このように、丹後における人々が集う場としての成相寺を紹介し、成相寺旧境内出土品（宮津市蔵・に）から成相寺の草創期の姿を解説し、最後に成相寺参詣曼荼羅（成相寺蔵・ほ）を取り上げ、人々が参詣に集まる様相や丹後近海での生業など、丹後の生活世界を併せて見ていった。

甲・乙の解説ともに、参詣曼荼羅の拡大パネルを使ったクイズを出題する、参詣曼荼羅に描かれた人の数を三択形式で問うなど、参加者の興味を誘う工夫を凝らした。また、神獣鏡に描かれた場面や参詣曼荼羅に描かれた人々など、見過ごされがちな細かい部分へ参加者の視線を誘導する解説を目指した。

解説当日は二回とも30人程の参加者を得ることができ、解説者からの問いかけへのレスポンスも盛んで、時には参加者から予期せぬ質問が飛ぶなど、総じて活況であったといえる。特に11月4日の全体リハーサル後は、資料の「魅せ方」のブラッシュアップに努め、拡大パネルの作成、参加者への問いかけなどを意識した解説を作っていたことが大きいのではないだろうか。また、参加者のなかで積極的に答えてくれる人と一対一のやりとりにならないよう、後方の参加者の呟きも拾い上げることを心がけた。

反省点としては、参加者と資料との距離の問題、解説のまとめが不十分であった点が挙げられる。特に資料との距離については、甲の「イ・ロ」、乙の「に」は資料そのものの小ささから間近で見ることができる参加者が限られ、甲の「ニ・ホ」、乙の「ほ」は展示スペースの構造上、参加者が横に広がらざるを得ず、資料や解説者との距離が生まれてしまう。動線への配慮に加え、解説者からの積極的な誘導が求められる。 (三輪)

②、B班展示解説

2015年5月13日の第1回全体会議後、B班は6月2日、8月6日〔※〕・31日、9月28日、10月1日〔※〕・6日・22日、11月4日〔※〕・5日・10日・26日、12月1日に班で打ち合わせを設定し、解説案の構成と解説準備・練習を実施した（〔※〕は全体会議と同日）。11月16・17日には、展示解説にかかる調査を含めた丹後地域現地調査を行った。これについては、本書別項を参照されたい。

B班の展示案は、「丹後の海とその生き物」をテーマに設定した。丹後地域の大きな特徴の一つである、地域の人々と海、および海生生物との関係について、展示資料の中から一部を取り上げて解説した。主に取り上げた資料は、新版浦島龍宮入之図（舞鶴市蔵・a）、与謝之大絵図（成相寺蔵・b）、木簡（舞鶴市・京丹後市・丹後郷土資料館蔵・宮津市蔵・c）、日本山海名産図会（京都府立総合資料館蔵・d）、伊根湾捕鯨実況図（伊根町亀島区蔵・e）である。

解説では、カメ・クジラや、タイ・イワシ・イカ・コノシロ・ブリなどの海産物を取り上げ、図像資料や文字史料の記述をもとに生産・流通の過程や利用法・信仰について、掘り下げて説明した。解説には絵図の中の漁業に関する表現を探してもらう、あるいはクイズを出題するなど、参加型で、かつ資料を見て考えてもらう工夫を交えた。また、資料に関連する、現在の丹後地域における伝承地・石造物や関連地域の景観を紹介した。これによって、古代から近現代に至る、丹後地域の人と海の生き物との関係の一端を、名産や観光といった現在の地域的特徴と絡めて考える契機としてもらうことを意図した。

B班の解説は12月13日・20日の2回実施し、いずれも常時30名程度の参加を得ることができた。解説後には、かつて地元に住んでいた頃に見聞きしたクジラ漁についてお話される方、絵図資料の内容について掘り下げて質問される方がおり、一定の反響を得ることができた。解説は両日とも盛況であったが、その分、資料を説明する際に、多人数の参加者にできるだけ間近で資料を見てもらえるよう誘導すべき場面がみられた。そうした状況への対応を改善していくことなどが反省点に挙げられる。（島本）

最後に、展示解説に関わる資料閲覧・現地調査にご協力を賜りました方々、ならびに展示解説にご参加いただきました皆様に、記して御礼申し上げます。

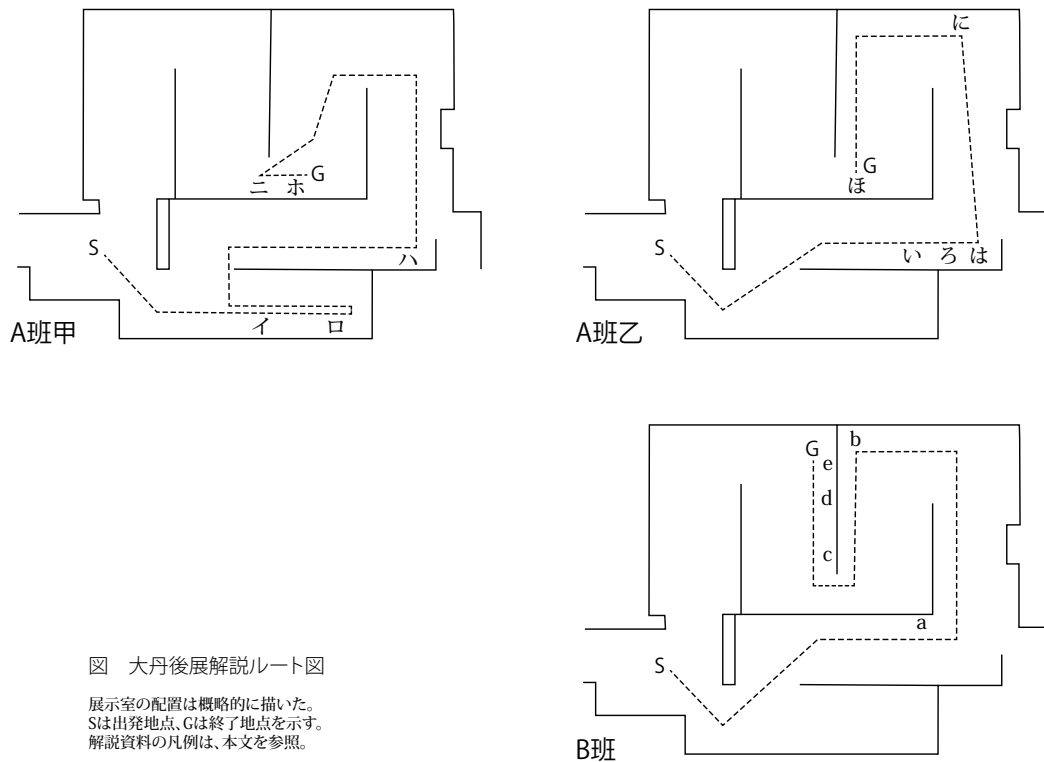




写真1 A班解説 甲 (12月6日)



写真2 B班解説 (12月13日)



写真3 B班解説 (12月20日)



写真4 A班解説 乙 (1月10日)



写真5 展示会場入口



写真6 館内のポスター